
魔法使いになりたい！

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いになりたい！

【Zコード】

Z0273E

【作者名】

秋月あさり（じしゃもひやん）

【あらすじ】

ええっと、ある日突然、魔法使いになっちゃったんです！たぶん。

みなさん、こんばんは。えーと、あたしの名前は珠瀬那々美たませ ななみ とります。

あたしは読書が好きですが、こういった文章を書くのは今回が初めてで、だいぶ戸惑っています。ですけど、どうしても文章にして残して置きたいことがあたしの身に起ったので、ここに書きたいと思います。

みなさん、テレビやマンガのヒーローに憧れたことがありますか？ あたしはあります。実はあたし、初めて公表しちゃいますけど、魔法使いに憧れています。

本気で憧れてたので人に言うのが恥ずかしかったのですが、言っちゃいました。だって、これを言わないと話が進まないんですけど。実はあたし、ある日突然『魔法使い』になっちゃったんです。

夢の中にあたしはいました。でも、夢の中にいる間はそこが夢だなんて、ちつとも思いませんでした。それが夢だと気づいたのは夢が覚めてからです。

そこには茶色いウサギがいます。でも、このウサギ普通のウサギじゃありません。身長は耳まで入れるとあたしより高かつたし、水色のジャケットにシルクハット、それにステッキまで持っていました。

絶対変ですよね。でも、夢を見ているときは変だなんて思いませんでした。そのウサギに対して何の疑問も抱かなかったんです。

ウサギはあたしの顔を見ると話しかけてきました。それも流暢な日本語ですよ。ウサギなのに変ですよね。あつ、見た目からして変ですね。

「やあ、こんばんは」

「こんばんは」

何であたしはウサギと擦拶なんてしてんでしょう。それも平然とですよ。

「キミが、世の中ってつまんないな～って思つたことない？」

「え～と、楽しさですよ」

「ふ～ん。ボクにしてみれば世の中なんて、ウサギかそつでないかの2つに分けられるんだけど、キミどうひ～？」

「あたしはウサギじゃありません」

今思うとちょっと変な会話ですね。でもこの後のウサギ質問があたしの運命を大きく変えてしまつたんです。

「じゃあさ、こんな分け方もできるよね。魔法使いかそつでないか。キミはどうひ～だい？」

「あたしは、魔法使いにはなりたいですけど……」

「世の中の全ては2つに分けられるのこ、なぜキミは迷うんだい？」

「あたし魔法使いになります」

「じゃあ、今からキミも魔法使いの方だね」

ジジジジジ……という警報みたいな音が夢の世界に響きました。するとウサギは2本足でぴょんぴょん跳ねてどこかに消えてしました。

あたしはウサギを追いかけて走りましたが、気づいたらベッドの上。つまり夢が覚めちゃつたわけです。

けたたましい音でうるさく鳴く目覚し時計を止めて、あたしはまたベッドの中に潜りました。ベッドの中はあつたかくて出たくないんですね。でも、今日は学校のある日なんです。

あたし、高校2年生あと数ヶ月もすれば3年生なんです。憂鬱で仕方ありません。

進路はいちおう大学進学ついでないことになつてるんですけど、何か先生とか友達に流されてそうなつちゃつただけで、どこの大学か決めてないし、本当に大学に行くのかもわかりません。

それから、今日は学校に行きたくない理由がちゃんとあるんです。今日つて2月14日なんです。みなさん、この日が何の日かご存知

ですよね？ そうなんですバレンタインティーです。

日本では恋する乙女たちが好きな人にチョコをあげる日ついでになつてますよね。実はあたしも恋する乙女なんてのになつちゃつてチョコを用意しました。それも本命チョコつて言われるやつです。バレンタインティーにチョコをあげるのも初めてだし、手作りチョコなんて初めて作りました。で、笑つてください、できたチョコレートの形 ハート型です。恥ずかしいくらいベターな形ですけど、だつてそれ以外思いつかなかつたんですよ。

でも、チョコレートは用意したんですけど、渡す勇気がなくつて。直接じゃなくてもいいんですよ、あのひとのバッグの中にこつそり入れたりでも。

あ～っ、でもあたしにはムリ。絶対ムリ、ムリ、ムリ、ムリ、ムリ！

そんなわけで、学校行きたくないんです。

ベッドの中であたしがうづくまつているとあ母さんが心配して見に来ちゃいました。あたし、学校無遅刻無欠席なんですよね。だから心配されちゃつたみたいですね。

コンコンと部屋のドアを叩く音がして、ドア越しにお母さんが声をかけてきました。

「那々美、どうしたの？ 起きているなら返事をしなやこ」

「はあ～い」

「どうして朝食を食べに来ないの？ 具合でも悪いの？」

「別に～～」

「別にじゃないでしょ、顔を見せなさい」

だるい身体を動かし、仕方なくあたしはベッドから這い起きてドアをちょっとだけ開けて顔を見せました。

あたしの顔を見たお母さんは驚いた表情をしました。

「那々美！ どうしたの顔が赤いわよ」

すぐにお母さんはあたしのおでこに手を当てて熱を計りました。すると、またお母さんは驚いた表情をしました。

「すうじい熱、今日は学校を休んで寝てなさい」

「ううん、学校行く」

「寝てなさい！」

「風邪とかじやないから大丈夫」

「大丈夫つてあなた」

お母さんの言葉が終わらないうちにあたしはドアをバタンと閉めてしましました。だつて、本当に風邪とかじやなかつたんです。好きな人のことベッドの中で考えてたら、身体が火照つてきちゃつて……恥ずかしいことに顔が真つ赤になっちゃつたんです。なんか情けないなあたし。

学校に行くのは嫌だつたけど、今までの学校生活を優等生ちゃんとして過ごしてきたので、そのプライドを守るために学校に行くことを決意。

パジャマから制服のブレザーに着替えるんですけど、毎朝めんどくさいですよね。だから、『自動的に制服に着替えられないかなあ』なんて思つたんです。そしたら

「あれっ！？ あたし何時の間に着替えたんだろ？」

パジャマが制服に変わつてたんです。そのときのあたしは『寝ぼけてたのかなあ～』つて思つたんですけど、これが魔法だつたんですね。

制服に着替え終わつたあたしは眼鏡を探します。いつもの行事なんですけど、この日に限つて眼鏡が見当たらない。たしか、いつもどおり机の上に置いといたんですけど、無かつたんですね。

「あっれ～、おかしいなあ。どつか別の場所に置いたつけ？ どこを探してないんですね。

「こんなとき魔法が使えたら、はい、このとつり手の中に眼鏡が……！」

あたしは目を疑いました。たしかに目は悪いんですけど、こんなことが起きるなんてありえません。眼鏡が手の中にあるんです。

「ううそだ～」

何が嘘なんでしょうな。思わず言つてしまつたのでわかりません。

ここであたしは今朝見た夢を思い出しました。でも、まさか魔法

が使えるようになつたなんて、普通は信じられませんよね。

「なんちやつてね。ナイナイナイ、あり得ないよね～」

自分を落ち着かせるように言いましたが、事実眼鏡は手の中に突然現れたわけですし、ちょっと試しにすることをやってみました。

「テレビよ～、つけ！」

つきました。テレビの電源が入つちゃいました。驚きです。

テレビを見ながらあたしは思わず固まつてしましました。身体は止まつてますけど、頭の中はパニック状態です。

だつて、魔法使いですよ。魔法が使えるようになつちやつたんですよ。

「どうしよう、どうしたらいいの！？ 大金持ちとかも魔法でなれるのかな？」

魔法ならなんでもできるかもされません、けど、大金持ちっていうのは叶えようとしませんでした。

あたしつて結構小心者で、もし、本当になんでも叶つちやつたら……つて考えると、恐くなります。だから、魔法を使わないことに決めました。

実際、なんでもできるようになると、恐くて何もできませんでした。でも、本当はちょっとだけ大金持ちになろうとも考えましたよ。

「使わない、使わない、使わない」

念佛でも唱えるようにあたしは自分に言い聞かせます。魔法使いなんてなるんじゃなかつたつて本気で思いました。厄介なことになつちゃいましたよね。

でも、本当に魔法使いになつてしまつたのか半信半疑、でも、魔法を使うのは自分的に禁止したので魔法は使いません。それに魔法があんに簡単に使えるなんて、魔法を使うごとに寿命が減つたり、デメリットがあると嫌なので絶対使わないと再度自分の心に確認です。

地球爆発を魔法で叶えたら、わたしにどんな不幸が起るのかと考えるとぞつとします。つて地球が爆発したらあたしも死にますね。そーか、魔法でどうにかすれば死ないかも知れませんね。

時計を見ると、だいぶ時間が過ぎてました。ヤバイです、遅刻ですよ。今まで遅刻したことなかつたのに。

学校まで歩いて15分。学校が始まるまで10分。走れば間に合いますけど、体力の自信のなさなら人に誇れますよ。そんなこと誇りになりませんね、ごめんなさい。

部屋を飛び出し、家も飛び出すあたし。命をかけて走りましたよ。体育の時間だつてこんなに真剣に走つたことはありません。

「ぜーはー、ぜーはー、肩で息をしながら必死であたしは走りました。そして、どうにか学校について、チャイムと同時に自分の席に着席。バタンとそのまま机に突つ伏しました。

「死ぬうー

このときのあたし、絶対死相を浮かべてました。わたしの横から誰かが声をかけているようです。意識が朦朧としていて誰かわかりません。

「な……さん、だいじょ……」

あたしは声のする方向を死にそうな顔で見上げました。そしてら、そこにはあの人があいたんですね！

「那々美、大丈夫か？」

なんとあたしに声をかけていたのは、鳴海愛さま。^{なるみまな}あたしの好きな人です。しかも、実は女性なんですね。

あの、あたしはノーマルですよ。でも、愛さまだけは別格なんですね。美人だし、かつこいいし、生徒会長もしてるんですよ。

この愛さまは、うちの学校の女子生徒の憧れの的なんです。毎年女子生徒からたくさんの中ヨコをもらっているし、普段から『きやー、愛さまーつー！』って言われてますし。

あたしも愛さまみたいにならたらなあーって思います。でも、魔法はダメです。

愛さまっていつもゴスロリで学校に来るんです。いちようこの学校って制服あるんですけど、愛さまは着なくてもいいみたいです。それというのも愛さまの「」実家つてちょっとお金持ちで、愛さまの後ろには大きな力がいつも渦巻いてるんですよね。

「那々美、大丈夫か？ 保健室に私が運んでやつてもいいぞ」
愛さまの口調って、男性口調なんんですけど、そこがまた痺れるんですね。ハスキーな声で、文化祭では歌も歌つたんですけど、それがまたよくつて、もう、あたしは愛さまのトリコです。愛さまにだったら、この身を捧げてもいいです。つてちょっとあたしバカですかね？

「愛さま、あたしなら大丈夫ですから心配しないでください。あ、先生も来たみたいですし、愛さまも席についた方がいいんじゃないですか？」

「ああ、そうしよう！」

はあ、ラッキーです。愛さまと朝からしゃべれるなんて、恍惚に浸ってしまいます。

白衣を着たナイスバディな女の人が教室に入つて来ました。この人、うちの担任の玉藻^{たまも}妖狐^{ようけ}先生です。かなり変わつてます。

変わり者の多いこの学校ですが、玉藻先生はかなり変わつてます。だって、学校を吹つ飛ばして消滅させたんですよ。……噂ですけど。去年の1~2月、朝学校に行つたら、学校が消失してるんです。あのときは本当に驚きました。どうやら玉藻先生が実験に失敗して学校を吹つ飛ばしたらしいんですけど、本当のところはわかりません。玉藻先生は科学教師なんんですけど、自分では『可学』教師つて言つていて、その可学つていうのは何でも可能にする学問だそうです。その可学の実験をするために、学校のどこかに秘密の研究所をつくり、日夜生徒相手に怪しげ実験に耽つていてるそうです。

モデル歩きで教壇に立つた玉藻先生の胸がたわわに揺れました。無駄に豊満な胸ですが、あたしもちょっとくらい分けて欲しいですね。

「みんなあ～ん、おはよ～。今日も元気に適当にがんばりましょうねえん」

毎朝毎朝、玉藻先生の適当なあいさつひとことで朝のホームルームは終わるんですけど、今日はもう少し話が続きました。

「みなさんもご存知、今日はなんとバレンタインでしょ？だからあたしはみんなのためにあるものを作ったんだけど、いるかしらあん？」

玉藻先生は白衣のポケットから綺麗にラッピングされた何かを取り出して、高らかに言いました。

「じゃじゃ～ん、これはなんと食べた相手が自分のことを好きになつてしまふチョコレートよおん。今日はなんとこれを限定20個、定価消費税込みで一万円であなたたちにご奉仕するわよおん。欲しい人はあとで職員室に買いに来るよう」以上

学校で商売するなんて、あり得ない。こんなことを思う前に普通なら、あんなチョコレートこの世にあるわけがないと思うのが普通かもしれないけど、玉藻先生なら作れちゃうんだよね。……あつ、そう考えると、あたしの魔法もそんなにすぐないことに感じてきたな。玉藻先生の可学より、あたしの魔法の方が現実的かも。

あ、ちなみに、玉藻先生の作ったチョコレートは玉藻先生が職員室に戻つてから5分で売り切れたそうです。しかも、限定20個つて言つてたのに、実際は50個あつたみたいですよ。

朝のホームルームも終わり、すぐに一時間目がはじまります。1時間目つて朝のホームルームが終わつてから5分で始まるんですよ、短いですよね。普通の授業の間は10分休みが入るんですけど、1時間目の前は5分。しかも、今日の1時間目は体育。

5分でどうやつて着替えろつて言つんでしょうか？　でも、文句を言つてないで着替えないと授業に遅刻します。

ここである重大な事実に気がつきました。なんと、体操着を忘れてしまつたんです。しかも、バッグも忘れてます。

かなり迷いました、魔法を使うか。でも、使つちゃいました。こ

のくらいなら大目に見てもいいですよ。

誰も見てないうちにバッグをあたしの部屋から教室の床に瞬間移動させました。近くに結構人がいたのでドキドキしましたが、どうにかなりました。でも、あとで考えると誰もいないところに行つて、魔法で体操着に着替えれば済みましたよね。あたしつてバカですね。

更衣室つてあるんですけど、時間がないのでみなさん教室で着替えます。もちろん下着姿になんてなりませんよ、うまくワイシャツを着たままで着替えるです。あ、うちの学校の女子生徒つてブラウスじゃなくつてワイシャツ着てる子の方が多いんです。

ブラウス着ていると男子たちにお嬢様とか言われてからかわれるんです。ヒドイと思いませんか……実はあたしも被害者だつたりします。

体操着をワイシャツの上から着て、そのあとでワイシャツを脱いで体操着の首のところから抜くんです。体操着の下はハーフパンツなんですけど、冬はジャージです。そのジャージをスカートを穿きながら穿いて、スカートを脱ぐ。で、ジャージの上を着て完璧です。あたしは体操着に着替えるの早い方なんですけど、制服の上からジャージを着る人には負けます。でも、それってズルですよね。それに制服のまま汗とかいたら嫌じゃないですか、つてそういう人は真剣に体育の授業受けないから汗かかないんですね。

体操着に着替え終わつたあたしは体育館に走つていきます。廊下を走るなつてよく言いますけど、走らないと遅刻するので走ります。でも、走るの苦手なので小走りです。

チャイムと同時に体育館に駆け込んでギリギリセーフ。毎週こんな感じです。

チャイムはもう鳴り止んだんですけど、生徒の集まりが遅いんですね。体育教師のベルバラこと伊原尚美先生は毎週張り切つてるんですけどね。

あつ、ベルバラっていうあだ名は、この先生の髪の毛の色と髪型が某ベルバラに登場するオスカルに似ているからそう呼ばれているんですけどね。

んです。確かに顔は綺麗なんですけど、言動がちょっと……。

「カワイイぞマナあー、いつ見てもそのジャージ姿が魅力的だ」
ね、変でしょ。しかも、愛さまに平気でハグハグするんですよ。
でも、愛さまはちゃんと避けるのでバルバラはいつも宙を掴みます。
愛さまのジャージ姿はいつ見ても素敵です。いつも「スローリと
のギャップがなんとも言えず、一部マニアでは好評です。

あたしが愛さまのジャージ姿に見とれていると、いつの間にか全
員集合したみたいです。

今日の授業はバスケットボールだそうです。ベルバラは本当はフ
ェイシングが得意なのでフェイシングをやりたいそうですが、残念
ながらフェイシングは授業のカリキュラムに入っていません。

前に言いましたけど、あたしつて運動が得意じゃないんです。つ
まり運動オーナチつてやつですね。特に球技は苦手で、できることな
ら休みたいです。

バスケットをするにあたつて、まずはチーム分けです。ここであ
たしの運が試されます。愛さまと同じチームになれるかのチャンス
です！

がしかし、運命つて時として皮肉なものです。なんとわたし愛さ
まの敵になつてしましました。ショックです。

たかが三分の一の確立だつたのに、なんてあたしは不幸なんじ
ょうか。わたしは愛さまと戦うなんてできません。そんなことでき
ません！

恨めしそうな目で愛さまのチームを見つめるあたし。そこであた
しはあることに気がつきました。見上宙さん^{みかみそら}。

愛さまと仲のよい見上さんという方がいるんですけど、どういっ
わけか、愛さまと見上さんって一緒になることが多いんです。席替
えも毎回近くだし、今回だつてくじ引きでチーム分けしたんですよ。
絶対裏があります。

そう言えば、見上さんが超能力者だつて噂を聞いたことがありま
す、つていうか学校全体に蔓延している噂なんですけどね。まさか、

その超能力を使って……！？

超能力なんてズルイです。あ、あたしも魔法で……ダメです、いけません、魔法は使わないって決めたんです。

そうです、何^ごとも正々堂々とです。あたしも正々堂々と全力で愛さまと戦います。愛さまの胸を借りて体当たりでがんばります。ですが、いや試合がはじまるときもできなくて。コートの隅っこであたふたしちゃつてます。いつものことなんですけどね。

完全に戦力外って感じですね。あたしつてなんで運動できないんだろう。ちょっと虚しいな。

試合はあたし抜きでどんどん進んで行きます。うちのチームは佐藤美咲さん^{とうみさき}が張り切つてがんばつてますし、あたしなんていなくてもいいですね。

あたしがぼーっとして適当に辺りを見回していると、ある人と田^たが合つてしましました。見上さんです、見上さんと田^たが合いました。あたしの他に戦力外の人、見つけちゃいました。見上さんもあたしと対極のコートの隅でぼーっとしています。しかも体育座りで試合を完全放棄です。

あたしと田の会つた見上さんは不適な笑みを浮かべました。ちょっとあたしをバカにしているような笑みです。自分だつて戦力外なのに。

訂正します。見上さんはこの後活躍しました。

あたしと田の合つた後、見上さんは突然立ち上るとボールを見ました。その見方が尋常じゃない感じなんです。まるで、ボールに念を送つているような感じなんです。

佐藤さんが持っていたボールが突然上空に上がりました。佐藤さんが投げたのではなく、ふあふあーっと勝手に宙に浮んだんです。その瞬間あたしは見ました。見上さんが不敵な笑みを浮かべるのをこの目でしつかりと。

宙に浮んだボールは見上さんの腕に吸い込まれるようにして、飛んでいきました。超能力です、絶対これって超能力です。つて毎回

思います。

見上さんってたまにみんなの前で不思議な能力を使うんですよ。でも、誰も本人には確かめないんです。実際には確かめた人がいるらしんんですけど、その人は謎の不慮の事故にあつたとかで、その噂が流れてからは誰も見上さんの超能力は見て見ぬふりをしています。ボールを取つた見上さんは、ボールを転がしました。そう、そうの姿はまさにボーリング。バスケでこんなことする人ははじめて見ました。

地面を転がるボールはまるで意志を持つているように人々の間を抜けて行きます。絶対見上さんが遠隔操作してるんですけどね。

そして、ボールは突如高く舞い上がり、ゴールのリングに吸い込まれていきました。反則だと思つんですけど、超能力を使つたら反則つてルールないですよね。

今のゴールでうちのチームと愛さまチームが同点に並びました。そう考えると、やつぱり今の反則だと思います。超能力で同点に並ぶなんてズルですよ。

あたしも見てるだけじゃなくつて、何かをしなきゃという衝動に駆られました。あたしだつてきっと何かできる。ファイトあたし！意気込んで歩き出したあたしですが、何をしていいのかあたふたです。困りましたやつぱり何もできません。

敵がこちらにドリブルしてきても遠くに逃げちゃうし、ボールが飛んできても避けてしまいます。あたしつて役立たず。てゆーかお荷物？

「珠瀬さんボール！」

佐藤さんの声がしたなあーと思つたら、大変です眼前までボールが迫つてきているじやありませんか！

「あわわあー！」

飛んできたボールを偶然にもキャッチしちゃいました。ミラクルですね。でも、これからどうしたらいいんでしょうか？

「あのおー、これからあたしは何をすればいいんでしょうか？」

「珠瀬さんシューート！」

佐藤さんが叫びます。どうやらあたし、敵の「ゴールドに突っ立つてたみたいですね。でも、あたしシューートなんてしたことないですよ。

「ああっ、愛さまー！」

あられもない声を出してすいません。だって、気づいたら愛さまがあたしの前にいるんですもの。

愛さまはあたしからボールを奪おうと襲い掛かつてきました。ああ、このまま襲われたい……じゃなかつた。あたしは正々堂々と愛さまと一緒に打ちです。

とにかくシューートです。ここはシューートしかないです。もしかして、今があたしつてちょっとぴりカツコいいですか？

一心不乱であたしはジャンプしてシューートしました。かなり高く飛び上がって、ダンクシューート……ダンクシューート？

場の空気が一瞬にして固まりました。

あたしの手はリングにぶら下がつて、足はぶらぶら。ボールは見事リングに入つて地面に落ちました。

ちょっと冷静になつて考えましょう。

あたしは運動オッチで、背も高くなれば、ジャンプ力なんてないですよ。でも、今ゴールリングにぶらさがつてますよね。やつちやいました。

魔法です。魔法使つちゃつたんです、きっと。

下を見ると愛さまがあたしのことを見つめています。

「玉藻の実験台にされたのか？」

愛さまのお優しいお言葉です。

問題はそんなことじやないですね。確かにこの学校で奇々怪々な出来事が起つた場合の原因は大抵玉藻先生にあります。ですけど、これは……。

「偶然です、偶然！」

かなり苦しい言い訳をしてしまいました。偶然のわけないじやないですか。あたしの言葉にみなさん沈黙です。

「いつの場合は、話をはぐらかせて逃げた方がいいと思つんす
けど、どんな話をしたらいいんでしょう？」

「ううですね、そうです。まずはここから降りましょう。降りてか
ら言いくつをしましょうね。」

「……降りません。ちょっと高いですよ。運動オノチのあたしが
降りられるわけないじゃありませんか！？」

地面が遠く感じます。手も痺れました。目からちょっと涙
も溢れています。これって絶体絶命つてやつですね。

「助けてください。降りません……誰か助けてください！」

叫んでもました。恐怖から我を忘れて叫んでもました。そんなあたし
に愛さまはお温かい笑顔をくださいました。

「私が受け止めてやるからジャンプをするんだ」

愛さまの腕が大きく広げられ、あたしを受け止める準備OKです。
でも、愛さまの胸に飛び込むなんて、あたし、あたし、恥ずかしく
つてできません。

「どうしたんだ？ 早く私の胸に飛び込んで来い」

飛び込んで来いつて言われても、困ります。できません、あたし
にはできません。愛さまの胸に飛び込むなんて恐れ多いことできま
せん。

あたしが躊躇している間に、体力の限界つてやつが来ちゃつたみ
たいです。汗で手が滑りそうです。もう、ダメです落ちます。死に
ます。絶対あたしドジだから頭打つて死んじやいます。

「ああ……もうダメです

思わず口をつぶり、手を滑らせ床に落下するあたし。ビルの屋上
から落下する気分つてこんな感じなのでしょうか？ 妙な浮遊感、
そして、やわらかく温かい胸の中……思わずハグハグ……じゃなく
つて胸の中？

あたしがゆうくつと口を開けると、そこには笑顔の愛さまのお顔
が。眩し過ぎます。ダメです、そんなに見つめられたらあたし可笑
しくなっちゃいます。

「大丈夫か珠瀬、顔が赤いぞ」

そんな直球で言わないでください。だつて、愛さまがあたしのことを見つめるから。

心配した愛さまのお顔があたしの顔を間じかで覗き込んできます。柔らかそうな紅い唇が急接近。ヤバイです、変な想像をしてしました。

ダメです、限界です。もう、愛さまに嫌われてもいいから、その唇を奪いたい。……なんしたことできるわけないじゃないです。でも、限界です。

意識が遠退き、あたしは気を失つてしましました。恥ずかしいことに昇天しちゃいました。

目が覚めるとそこには……。

「うわあつ！」

素っ頓狂な声をあげてしまつてしまいません。だつて、また愛さまのお顔があつたんですね。

「すまない、脅かしてしまつて」

愛さまのお顔が離れます。そして、どんどん愛さまの顔がぼやけて……夢の中、じゃなくつて、眼鏡がない！？

「眼鏡は？ 眼鏡はどこ…？」

「ああ、眼鏡ならそこに」

眼鏡を見つけて立ち上がったあたしの頭から何かがぼとつと落ちました。濡れたタオルです。

「あの、これって？」

「熱があつたみたいなので、それで冷やしてしたんだ」

「『めんさない、心配をかけてしまつて』

どうやら、愛さまがあたしを保健室まで運んでくれて、ずっと付き添つてくれたらしいです。そんな迷惑を愛さまにかけるなんて、あたしつて罪なひと。

眼鏡を掛けて、ようやく落ち着きました。眼鏡掛けてないと拳動

不審になっちゃうんですよね。

落ち着きを取り直したと思つたら、愛さまがあたしのことを見つめてるじゃありませんか！？

「眼鏡もいいけど、素顔の方が可愛いな」「えつ？」

「珠瀬の眼鏡を掛けたない顔はじめてみたけど、その方が素敵だな」「素敵！？」

愛さまに素敵だなんて言われるなんて、絶対今日中に地球爆発しますよ。でも、うれしいです。

「コントクトにはしないのか？」

「眼鏡の方が楽ですから」

「そうか」

愛さまはちょっと残念そうな顔をしていましたけど、これでいいんです。眼鏡を取つたあたしの顔は愛さまだけのものです。コントクトなんかにしたらいろんな人に見られちゃうじゃないですか。愛さまがあたしの素顔を見て、『素敵』って言つたことはあたしの胸に大事にしまつておきます。

愛さまは何かを思い出したように、ベッドの下に置いてあつたバッグを持ち上げました。それってあたしのバッグじゃないですか？「目が覚めたら、早退した方がいいと思つて持つて来たのだが、余計なお世話だつたか？」

「いいえ、もう帰ります。体調悪いみたいですから、帰ることにします」

「その方が私もいいと思う。まだ顔がだいぶ赤いみたいだしな」それは愛さまと保健室で一人つきりだからです。あんなことや、こゝんなこと想像しちゃつて……つてなに考えてるのあたしつたら、バカみたい。

バッグを愛さまから受け取つた時、あることに気がつきました。そう、朝、バッグに入ってきたもの。

「あの、愛さま」

「ん？」

あたしはバッグの中に大切に入れてあつたものを愛さまに手渡しました。勇気がいりましたが、勢いです。

「これ、受け取つてください」

わたしが差し出したのはバレンタインデーチョコレート。心臓バッグバッグで身体が熱いです。

愛さまはにこやかに笑つてくれました。

「ありがとう」

愛さまがあたしの差し出したチョコを手に取つた瞬間、愛さまの指先があたしの指先にちょつぴり触れました。身体に電撃が走つたみたいにゾクゾクつてしましました。

「ここので食べてもいいかな？」

「は、はい」

なんであたし『はい』なんて答えちゃつたんだろう。だって、ここで開けられたら……。

時すでに遅し、あたしの顔は真っ赤になつて吹つ飛ぶ寸前です。だつて、チョコの形が、チョコの形がハート型なんだもん。しかも、『愛します』つてホイップチョコで書いてあるし。自爆です。

ハート型のチョコを見た愛さまは少し笑を浮かべました。てゆーか、愛さまに笑われた！？ もつ、恥ずかしくつて、生きて行けないです。

ああ、そしてチョコレートが愛さまのお口の中に……色っぽいです。

「うん、おいしい」

おいしいつて、溶かして固めて、ホイップしただけですよ。もうダメです。恥ずかしすぎて、また、意識が……。

「大丈夫か！？ 顔がさつきよりも赤いぞ！」

慌てたようすの愛さまがあたしの顔を覗き込もうとして、足を滑らせで、そのままあたしの身体を……。

……頭が真っ白になりました。だつて、だつて、愛さまの柔らか

い唇が、あたしの唇に重なつて……。

「す、すまない！？」

愛さまは飛び上がり、目を丸くしました。こんな愛さまの表情を見たのは初めてです。だつて、いつもクールな表情ばかりで。この表情はあたしだけのものなんですね。

保健室に沈黙が流れました。

少ししてあたしは正氣を取り戻し、ことの重大さに困惑。だつて、キスですよ。憧れの愛さまとキス。それもあたしのファーストキスを奪われました。

もう、何がなんだか……絶対今日で宇宙は滅びます。

あたしは顔を真っ赤にして保健室を飛び出しました。

恥ずかしさもあるけど、それよりもつれしさでいっぱいです。だつて奇跡が起こったんですよ。……もしかして、魔法のチカラ？違います。魔法のチカラなんかじゃないですよね、きっと。でも、どつちでもいいんですけどね。これはあたしの大切な思い出ですから。

とにかく誰でもいいから、素敵な思い出ありがとう♪
あたしのファーストキスはチョコの味。なんせやつてね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0273e/>

魔法使いになりたい！

2010年10月8日14時31分発行